

花粉症にかかる人が最も多い 県は、少ない県の四十五倍

もうすぐ、花粉症気味の人にとって憂鬱な季節がやってくる。山国の日本は国土の約七〇％が山地で占められており、そこに茂っている森林の約四〇％が人工林だと言われている。終戦後、荒れ果てた森林資源の回復を図るとともに、治水対策などの問題もあって盛んに植林された。日本ではスギやヒノキが最も重要な材木だとされてきた経緯があり、植林されたのもスギとヒノキが圧倒的に多かった。ところが、植林から三十〜四十年が経ち、壮年期を向かえたスギやヒノキによって、人々がこれほど悩まされることになろうとは誰が予測したのだろうか。スギ花粉は二月から四月ころまで飛散するた

る。スギ花粉は二月から四月ころまで飛散するた

*スギ花粉症有症率 (2003年、科学評論社「アレルギー科」)

都道府県	有症率 (%)	都道府県	有症率 (%)
北海道	2.9	滋賀	12.5
青森	11.9	京都	16.7
岩手	9.4	大阪	14.3
宮城	21.3	兵庫	11.2
秋田	8.2	奈良	14.3
山形	23.1	和歌山	17.4
福島	13.8	鳥取	11.4
茨城	20.4	島根	14.1
栃木	22.0	岡山	11.4
群馬	19.2	広島	16.6
埼玉	24.6	山口	16.5
千葉	20.1	香川	13.9
東京	20.4	徳島	13.8
神奈川	18.1	愛媛	11.3
新潟	11.3	高知	25.7
富山	8.4	福岡	11.2
石川	8.5	佐賀	18.9
福井	13.4	長崎	8.0
長野	25.9	熊本	10.3
山梨	26.9	大分	14.2
静岡	25.6	宮崎	11.6
岐阜	21.0	鹿児島	4.7
愛知	17.5	沖縄	0.6
三重	24.8		

め、患者はこの時期に急増し、国民の六人に一人が花粉症になるとさえ言われている。スギなどの花粉が、多くの人々を苦しめるものであることが初めから分かっていたら、国も別の種類の木を植林したのだから、今となっては後の祭りだ。春になるとこれらの木々が大量の花粉を飛散させ、それが鼻や目などの粘膜に付着して鼻水や鼻づまり、くしゃみ、目のかゆみなどの症状を引き起こす。だが日本全国の地域でも、花粉症に悩まされている人が多くいわけではない。花粉症のおよそ七〇％がスギ花粉症だと言われているが、スギ花粉症にはほとんど縁がないうらやましい地域もある。スギ花粉症の有症率が最も高い県と低い県とは、実に四十五倍近い開きがあるのだ。当然のことながら、スギの木がない地域はスギ花粉が飛散することはない。しかし、飛散距離は最大三百kmにも達すると言われているので油断はできない。スギの木がきわめて少ない東京でも、スギ花粉症にかかる人の比率が

高いことからみてもそれが分かる。北海道と沖縄ではスギの木が少なく、植林もほとんど行われなかつたので、花粉症の有症率は驚くほど低い。また、花粉症の有症率は地形にも左右される。周囲を山に囲まれている地域は、どの方向から風が吹いても大量の花粉が飛散してくるからだ。そのためか、日本でスギ花粉症の有症率が最も高いのは海に面していない山梨県(二六・九%)で、二位も周囲を山に囲まれている長野県(二五・九%)だ。だが、三位高知県(二五・七%)、四位静岡県(二五・六%)、五位三重県(二四・八%)はいずれも片側が太平洋岸に面した県なので、そうとばかりは言えない。要するに、スギなどを多く植林した地域が、花粉症の有症率も高いということが言える。スギ花粉症の有症率を地域別にみても、日本の北と南の地域で低く、本州の中央部で高い。また、日本海側の県より太平洋側の県の方が有症率の高いことが分かる。有症率の地域格差は想像以上に大きく、日本一スギ花粉症の有症率が低い沖縄県(〇・六%)は、日本一高い山梨県のなんと四十五分の一にすぎない。そのため、スギ花粉が飛散する時期に、旅行などで沖縄に脱出する人も少なくないようだ。

高いことからもみてもそれが分かる。北海道と沖縄ではスギの木が少なく、植林もほとんど行われなかつたので、花粉症の有症率は

いまやスギ花粉症は「国民病」とさえ言われており、今後も増加していくことが予想されている。各自自治体もその対策に多くの予算を費やしている。そんな状況下で朗報もある。富山県森林研究所では、無花粉スギを種子から生産する技術を開発したという。今後、無花粉スギが大量に生産されるようになると、スギの植え替えをすることによって花粉症を大幅に減少させることができるのではないかと、各方面から期待されている。